

論文要旨

アニメーション製作における日中共同事業に関する研究 -初の合作作品『シュンマオ物語タオタオ』の成立を中心に-

中国のアニメーション産業は、中国におけるアニメーションの元祖と言われる「万氏兄弟」が、1926年に上海で『大鬧画室（アトリエの大騒ぎ）』を制作したことに始まる。第2次世界大戦中は日本人が満州映画協会でアニメ制作を行っていたが、敗戦と同時に協会の設備機材は中国に引き渡され、一部の日本人が残ってアニメ制作の指導にあたった。1956年には、アニメ専門の制作所として「上海美術電影制作所」が設立された。当時、中国で唯一だったこのアニメーション制作所は、1960年代に次々とアニメ映画を発表したが、1966年から10年に及ぶ文化大革命で、アニメーション制作は完全に停止した。改革開放が開始した時、中国のアニメ制作能力は皆無に近い状態だった。

1972年の「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」（日中共同声明）、およびそれを踏まえた1978年8月の『日本国と中華人民共和国との間の平和友好条約』の締結を契機とする。その後、1978年10月から1991年にかけて、「日本映画祭」が日中文化交流の定例行事として中国各地で開催された。その文化交流の波に乗り、1980年代から2000年代前半にかけて、中国では『鉄腕アトム』、『ジャングル大帝』、『竜の子太郎』など日本のアニメーションを、映画館やテレビで視聴することができた。そのような背景のもと、1981年、山田洋次の原案・監修による初の日中合作アニメーション映画『シュンマオ物語 タオタオ』（シュンマオは中国語でパンダという意味）が制作された。中国のアニメーション産業の停滞期に、当時の日本のアニメ制作技術を学びながら制作されたこの作品は、その後の中国のアニメーション産業に大きな影響を与えたと考えられ重要な一作だと言える。しかし管見の限りにおいて、この作品に関する研究は今日まで、まだ手付かずの上程であると思われる。近年、動画サイトでのアニメ配信の普及などにともない、日中共同製作アニメが増え、日本の放送局や動画サイトで放送されている。映像表現に対する規制が厳しい中国では、中国国内におけるテレビ放送や劇場で公開できるジャンルや表現が子供向けの作品などに限られているため、日本との合作は、多様なジャンルへの挑戦とともに、中国のアニメ産業の成長を促進するための一つの手段としても機能している。その一方、大量生産が行われる日本のアニメ産業にとって、中国のアニメ制作会社の協力が必要とされている側面も見出せる。そうした中、制作技術や様々な条件による葛藤が起こるケースも出てきている。初の日中合作作品『シュンマオ物語タオタオ』における制作過程と影響を明らかにすることは、今後の日中のアニメ産業の研究に資するものと考えられる。

本論の構成は、以下のとおりである。

第一章では、日中両側の文献や資料を対照させながら、本論の背景となった中国のアニメーション産業の歴史を概観し、日中アニメーション通じた交流の歴史を述べた。中国のアニメーション制作が停滞期を迎える原因となった文化大革命が与えた影響について考察した。また本論の焦点となる初の日中合作アニメーション映画『シュンマオ物語タオタオ』のストーリー、キャラクター、スタッフや上映時間など基本情報について調べた。更に、配信サイトの普及による 2010 年代以降の日中共同製作アニメーション作品を調査し、制作側への聞き取り調査を行い、その企画のきっかけと制作過程について調べた。

第二章では、初のコラボレーション作品『シュンマオ物語タオタオ』に関する先行研究及び予備調査として、記事においてこの作品を紹介した人物への聞き取り調査を行った。この作品に関わる研究は現在のところ、ほぼ行われていないことがわかったため、当時の報道と関連資料を調べた。

第三章では、先行研究と予備調査で得られた情報や資料を重ね合わせてみると、『シュンマオ物語タオタオ』の成立に関しては不明点が多く見られる。まずは『シュンマオ物語タオタオ』の企画側と日中契約成立の経緯が不明である。この作品制作の仕組みについて記述がない。そしてパンフレットや公式の宣伝記事によると、天津工芸美術設計院は制作側として「シュンマオ製作委員会」と共に表示されたが、天津工芸美術設計院の出資とこの作品の所有権についても不明である。以上の不明点を踏まえ、いくつかの仮説を立てた。それぞれの仮説を検証するため、資料調査と当事者に対するインタビュー調査の 2 つの調査方法を通じて実施する計画を立てた。

第四章では、前章で立てた仮説を検証するための資料調査と当事者に対する本インタビュー調査の 2 つの方法を通じて、具体的な研究経過をまとめた。資料調査は、まず『シュンマオ物語 タオタオ』の制作者と企画側に関する資料の収集によって行った。資料の中に記載されている『シュンマオ物語タオタオ』の制作に関わる人物を探り出し、また公式情報で表示されていないが、ピー・プロダクションの社長であった、鷺巣富雄は『シュンマオ物語タオタオ』の制作に関係があると証明した。そして、アニメ評論家、明治大学国際日本学研究所特任教授氷川竜介教授を通して、当時『シュンマオ物語タオタオ』のアニメスタジオとして起用されていたアニメ制作会社株式会社白組の栗飯原君江に連絡をとり、インタビュー調査を行った。氷川を通じて、鷺巣富雄とピー・プロダクション及び『シュンマオ物語タオタオ』との具体的な関連性を調べるため、その息子の鷺巣詩郎の許可を取り、ピー・プロダクションの過去資料を調べることができた。『シュンマオ物語タオタオ』に関わる契約書など一次資料を得ることができ、インタビュー調査の補助となるものを集めることができた。

中国側に関しては、中国の SNS 微博(ウェイボー)を通じて、天津工芸美術設計院アニメ科現主任魏群と連絡を取った結果、当時の中国側制作参加者 4 人宋萍、張栄章、王云、肖瓏を紹介され、取材を行った。また中国側への調査により、当時天津に行った日本側のスタッフ、製作進行の小林正典を探し出し、そ

れまでの調査で得た資料や証言を照らし合わせながら、より詳しい情報を得ることができた。

第五章では、日中両側の当事者へのインタビュー調査で得た情報を作品に関わる一次資料と対照し、作品の成立とその制作経緯を分析し、仮説を検証した結果をまとめた。またいくつかの未解決点を指摘し、今後の課題にしたいと考える。